

暮らしの隣の心地良い緑地を、 住民自身で守り育てる楽しみ

〈里見緑地を守る会・どんぐり〉は、北広島団地に隣接する里見緑地の環境整備と保全を担っているNPO法人。住まいのすぐそばで散策や自然観察を楽しめる緑地を、住民自身の手で守っています。



地域の森として整備

里見緑地は、北広島市の北広島団地里見町5〜7丁目の南側に位置する第3周辺緑地の愛称です。昭和40年代に同団地の造成残土で整備された個所を含む約9haで、植樹林は強風に弱く頻繁に倒木が発生。人の立ち入りを拒絶するかのようになりセアカシヤの木々が鬱蒼と生い茂る緑地は森を楽しむどころではなく、一部は生ゴミの捨て場所となっていました。

平成21年、この緑地の環境整備・保全事業に、里見町5・6丁目自治会が助成金を得たため、自治会内に実動団体として住民ボランティアの会・どんぐりが発足。これが同法人の前身となります。

住民みんなの憩いの場に

遊歩道や見晴台、ベンチ、標識などを整備できたものの助成金は3年間のみ。せっかく苦労して整えた施設が無駄にならないよう、会長を務めていた村元邁さんが旗振り役



となり、自治会から独立した「里見緑地を守る会・どんぐり」を立ち上げました。

以来、息の長い地道な活動で里見緑地を守り育て、里見緑地は自然と触れ合える場所に変身。地域住民は住まいのすぐそばに心潤す自然がある暮らしを楽しんでいます。

ぜひ能動的な関わりを

「会員は自然が好きで、自身の健康増進にもいいので続けてます」と村元会長。現在の課題は高齢化で、植樹・

育樹や草刈、風倒木の処理などの野外作業計画を立てにくくなっているといいます。

栗やきのこの収穫、遊歩道での森林浴、丸太のベンチで一休みといったことができるのは、整備する人の手があるからこそ。現在の会員世代が引退すると里見緑地はかつての荒廃した森に戻りかねず、緑地の魅力を知る若い層への世代交代は急務です。「木育に関心のあるファミリーや、森をつくってみたい若い人にぜひ参加してほしいです」と村元会長は呼びかけています。



Report **01**
Number



里見緑地を守る会・どんぐり

正会員は68歳～92歳の16名で、年会費2,000円。

設立時の主な会員が60代だったためシニア層が中心だが、これまで蓄積した経験や資材を引き継げる次世代の参加を待っている。

環境問題が自分ごとになる、 木育を通じた気づきと学び

北星学園大学文学部の心理・応用コミュニケーション学科では、フィールド実習のカリキュラムに木育を採用。体験を通して、学生たちが社会問題に対する新しい気づきを得る機会となっています。



■契機は木の玩具の魅力

同学科が木育をカリキュラムに採り入れたきっかけは、地域の子育て支援活動での経験。すぐ玩具に飽きてしまう子が木製玩具だと遊び続けられるなど、「木の玩具にはいろいろな魅力があると感じました」と柿原久仁佳准教授。

以来、木育に関心を持つようになり、人と人のつながりを大切にする同学科のフィールド実習に、木が人を結ぶ木育は最適なテーマと判断。令

■体験から得られる気づき

和元年に実習先の一つとして採用しました。

実習では森の散策や箸づくりなどを通して木育を学び、木育イベントの手伝いや企画運営を体験し、最終的には動画やパンフレットなどの木育PRツールを完成させるのがゴールです。しかしフィールドでは、実際に木や自然に触れたときに何を感じるかを重視し、五感でのリアルな体感を促しています。

自然散策は小学校の遠足以来という学生もあり、実習後



■コロナ禍も充実の実習

は「今まで気にしていなかった木の葉が目がいくようになった」「買いたく物で見る商品が変わった」など、自身の意識変化を自覚するといえます。

コロナ禍では、現場に出られず教室内の実習が増えたものの、オンラインの活用で学びは充実。遠方の木育マイスターの講話のほか、初年度の実習で木育を学んだ学生が一年前、昨年とゼミに参加して企画した木育イベントなどもあり、緊急事態宣言下でも安心して活動できました。

「さまざまな体験は価値観

を振り返る機会にもなるようです。木育を通して学生たちが、自身や社会問題に新しい気づきを主体的に得ている様子を見るのはとてもうれしいことです」と柿原准教授。環境問題を自分ごととして、積極的に関与できるようにしてほしいと願っています。



Report Number **02**



北星学園大学 文学部 心理・応用コミュニケーション学科

木育のフィールド実習は、3年目となる令和3年度に14名が取り組み、これまで32名が参加。自分たちで企画を考え実践する達成感があり、学生からの評価も高い。